



【学校の理念】 本校の教育を支える考えです。

○まずは子どもを幸福にしよう。すべては そのあとに続く。(A.S ニール:イギリスの教育実践家)

○Iオンスの経験は 1トンの理論にまさる。(ジョン・デューイ:アメリカの教育学者)

【教育目標】

感情の自由	感情面を開放し、五感を全開にして豊かな感性を育みたい。
	何も恐れがなく、自分は自分でいいと思えるように。プラスの感情もマイナスの感情もそのまま出して大丈夫、どんな状態の自分でも受け止めてもらえると感じられるように。
知性の自由	知的好奇心を生かし、この世界についての知、人生の知を豊かに育みたい。
	知りたい・やりたいが叶えられる場だと感じられるように。うまくいかなくてもいい、何度でもチャレンジすればいいと思えるようになることで、学びが広がっていくと考えている。
人間関係の自由	多様性を認め、多様性から学ぶ、寛容で豊かな人間関係を育みたい
	自分は自分でいい、だから相手もそのままでもいいと感じられるように。みんなでもいい、一人でいてもいい、けんかしたっていい。人と一緒にいるということは、いろんなことが起きるものと知り、困ったときには、話し合えば解決できると考えられるように。

「子どもは、愛され自由であるなら、善良で正直な人間になる。」

「不自由な教育を受ければ、人生を存分に生き抜くことができない。そのような教育は、生命の感情的側面を完全に無視する。———現代の教育が対象としているのは頭だけである。しかし感情面が自由であるなら、知性はひとりでに発達するだろう。」(A.S ニール:『自由な子ども』より)

感情面を開放させること、つまり子どもが何も恐れず、自分は自分でいいんだと思えることが重要。そう思えることが、本当の意味での知性を育み、豊かな人間関係を築く力を育むことにつながると考えています。

【体験学習を中心とする理由】 体験学習を中心とした学びは、ジョン・デューイの理論・実践に基づいています。

- ・人々が生きることと無関係に教科が配置されるべきではない。
それぞれの教科の内容を結びつけた、相互関係を構築する必要がある。
- ・人間は、自然や実際の物、素材にじかに触れることでそれらがどうやって扱われ、社会のなかでどのように必要とされ、活用されているかを理解することになる。観察力、創意工夫して何かを構想する創造力、論理的思考力、直接触れることによって得られる現実感覚をはぐくむ。
- ・活動的な作業が行われている場合、自由なコミュニケーションの精神、つまりさまざまな意見や、提案や成果、そして経験した成功や失敗を、互いに交流するという精神が授業にみなぎる。対話し、制作し、探究し、表現することの興味は、子どもの成長にとって不可欠である。

【学校のスタッフが心がけていること】

の部分は、根拠としているニールの理論

①ただ子どもを認め・信じること

どんな感情を出していても受け止める。そのままの姿でOKと伝える。たくさん話を聞くこと。

感情を解放し、自分自身を認めることが、うまくいなくても「じゃあ次はどうしよう」と前を向く力になる。

大人は「味方だ」と感じられるように。変化には時間がかかるものと腹を括り、信じて、粘り強く待つこと。

- ・自由な子はあまり憎しみを抱かない。憎しみは憎しみを育て、愛は愛を育てる。愛とは味方になること、つまり認めてやること。これこそこの学校で欠くことのできない大切なもの。
- ・愛とはただ情緒的に好きだということではない。賞賛し、認め、受容すること。ホーマーレーンの言葉で言えば「味方」になること。自分は自分でいいんだという自由。

②いわゆる「しつけ」をしない

大きな声や叱責で子どもをコントロールしようとししない。ただし、人として対等な立場でやめてほしいこと、嫌だと思いう気持ちは大人も伝える。「それは大切なものだから触らないでほしい」「それは、嫌だからやめてほしい」というように人格を否定するのではなく、その行動をやめてほしいという形で伝える。

- ・教師は子どもに何をしたらよいか助言はしない。ただ、どのようにしたらよいかの技術的な情報を求められた時に援助するだけ。
- ・しつけが支配している学校では、生徒は弱い者いじめをしたり、暴力を振るったりするようになる。そういった学校で抑圧された時期が長いほど、反社会的な言動や表裏のある態度、厚かましさをなくすのにもっとも長い時間がかかる。自由がなんであるかを知るために長い時間がかかる。

③マナーの指導はしない

表面的なだけのマナーを大切にしない。自分自身である自由を認め続けることで、寛容な人に育ち、誰にでもやさしくなれる。そうすれば、表面的なマナーではない振る舞いが身につく。

- ・食事はとても大事な本能行為であり、子どもたちはまずお腹をいっぱいにすること。テーブルマナーは少し遅れて身についてくる。テーブルマナーでうるさくいう親(大人)は食べ物についてのコンプレックスを与えているにすぎない。子どもは大人と同じように食べ物を自由に選べるようにしてやらねばならない。嫌いなものを食べるように無理強いしてはならない。大事にしているのは食べ物ではない、子どもなのだ。
- ・人懐っこいのは良いマナーのひとつ。

④プロジェクトや基礎学習、よりどりへの参加の自由を認める

やりたくないことについて強制はしない。やりたくない気分ときは、休んでいてもいい。

ただ放っておくことはしない。時には、大人から誘ったり、何に興味があるのか探ったり、種まきをするのが大人の仕事。また、他の人の「やりたい」という自由を侵害する行動は認めない。

- ・転入生は、授業に出ようとししない。この回復期の長さはこれまでの学校が彼らに与えた嫌悪感の強さに比例する。平均 3ヶ月、最長 3年。
- ・学業が遅れている子で創造的な能力が欠けている子は誰一人としていない。学業の進み具合で子供を判定するのは致命的な間違い。優等生の方が創造性に欠ける。

⑤自由と放任の違いについて理解できるようにする。そして自由になるためにルールがあると伝える。

『自由』は『わがまま放題を許す』という意味ではない。『自由』と『自分勝手』の違いは、伝え続ける。

自由を主張する行動によって、誰かが嫌な思いをしたり、傷ついたり、困ったりする行動は本当の「自由」ではないということを伝え続ける。他の人の権利を大切にこそその「自由」であり、自由になるためにルールがある。

ルールがあることで、自分の権利を相手に伝えやすくなると考える。

- ・自由とわがままはちがう。子どもは立場を考えて行動すべきである。そして、他人の権利を尊重するように教えられなければならない。しかし、お説教や罰によってではなく、オープンなぶつかり合いによってでなくてはならない。
- ・好きなようにしてよいのは、自分に関する事。しかも自分だけに関わる事。
- ・しつけの厳しい家庭では、子どもは全く権利をもっていない。甘やかす家庭では子どもは全ての権利をもっている。正しい家庭は、子どもと大人が対等の権利をもっている。

⑥物の管理に関する指導を徹底しすぎない。

「しまっておいてほしい」「使ったら戻してね」「大切に使ってね」ということは、必要に応じて伝えるが、それが徹底できていなくても、できるまでしつこく言う、できていないからと叱責しない。

みんなで使うもの、学校のものは大切に扱ってほしいという想いは、伝え続ける。

- ・子どもというのは物には関心がない。子どもたちはわざと壊すわけでない、むしろ無意識に壊してしまう。
- ・子どもは生まれつき不注意な存在。
- ・大切にするように強制すると、子ども時代特有の遊びの生活がどうしても犠牲にされてしまう。どんな物に向かう時にも、自由意志と自由選択に任せる。思春期以前に特有の物に無頓着な時期を過ぎると自然にものを大切にようになる。

⑦危険な行為については放っておかない。

危険から子どもたちを守るのは大人の役割と考える。命に関わるような行為については、すぐに止める。

単独による危険な行動であったり、相手を大きく傷つける言動であったり、継続的に相手を傷つけるような言動については、大人が入って対応する。

- ・子どもにはまだ無理なことまで責任を負わせてはならない。ただし、子どもが出会う危険の半分は間違った教育が原因。危険な火の扱いをするのは、火とは何かを体験を通して知るのを禁止された子。

子どもに火とは何かを知らせるにはほんのちょっとやけどをすればすむこと。

【参考文献】

新訳ニール選集 全5巻 堀 真一郎訳

- ① 問題の子ども ②問題の親 ③恐るべき学校 ④問題の教師 ⑤自由な子ども

自由と言うけれど、子どもたちが何をしても大人は見守るのでしょうか？



「自由」と「自分勝手」はちがいます。他の人の「やりたい」を妨害するような行動、相手の自由を侵害する行動は許しません。例えば、「やめて」と言っているのに故意に続けて困らせる、わざと騒いで邪魔をする、人が作っていたものを故意に壊す…などの行為です。「自由を尊重する」というのは、子どものやりたい放題を許すということではありません。対等な人として、やめてほしいことははっきり伝えます。

まおい



児童玄関や教室に靴や荷物が散らばったままになっていますが、あれはずっとあのままなのですか？物がなくなったりすることはありますか？

持ち物や片付けに関しては、大人は声をかけることはしますが、完璧に片付けるまで何度も言ったり、叱責したりはしません。「子どもは物に関心がなく、生まれつき不注意である」とニールも話しています。実際に物をなくして探す子もいます。そこから考える子もいます。ただ、みんなで使うもの、プロジェクトで必要な道具、学校の施設設備は大切に使ってほしいと適宜、伝えています。

まおい

子ども同士がトラブルになったとき、大人は止めますか？
見守るだけですか？



子どもたち同士のけんかや言い合いのような日常的に起こるトラブルについては、すぐに間に入らず様子を見ます。気になる言い合いをしている時には、まず「大丈夫？手伝いが必要？」と尋ねることもあります。

子どもたち同士で解決に向かったり、話し合ったり、少しの間距離を置いてみたりと調整することも学びのひとつと考えています。大人に相談があった場合も、まずは本人がどうしたいと思っているのかを聞き、大人がどう入るか考えて対応します。何よりもお互いに話し合い、どういう想いでいたのかを伝えることが大切だと考えるからです。ただし、大けがをしそう、複数vs一人でいじめのような構図になっている、命に関わる危険があるという場合は、すぐに大人が止めに入り、大人が間に入って対応します。

まおい

プロジェクトや基礎学習のとき、活動に参加せず遊んでいるだけの子どももいました。それはそのままにしておくのですか？



「やめて」と言っているのに故意に続けて困らせる、わざと騒いで邪魔をする、人が作っていたものを故意に壊すなど、プロジェクトや基礎学習の活動を妨害するような行動は許しません。大人は、視界の片隅に入れながら様子を見ています。放っておくわけではなく「〇〇の活動しているよ」「これから話し合いを始めるよ」「〇〇担当の人、仕事が始まっているよ」と様子を見ながら声はかけていきます。ただし、集団でいつも活動に参加しない、初めからずっといないということが続く場合には、話し合いをする時間もちます。

まおい

子どもを「待つ」、子どもに「任せる」と言いますが、ただ「待って、任せて」ればいいのでしょうか？



子どもを「待つ」というのは、『ひたすら見守る』ということとは違います。子どもの様子や小さな変化をよく見て、大人から子どもに働きかけることも必要です。学校のスタッフも様々な種まきをします。どんなことをきっかけに子どもの行動が変化し、興味が広がるかはわからないものです。放置はしませんが、関わりはできるだけ最小限に。子どもたちの様子をスタッフも保護者も関わる大人みんなで情報共有し、一緒に試行錯誤しながら関わり続けていきましょう。

子どもに「任せる」というのは、大人が手を出してはいけないということではありません。任された経験が少なければ、子どもたちは混乱してしまいます。大人が全て先回りしてやるということではなく、助け舟を出すことは必要です。困っている時には、選択肢を示すという方法もあります。うまくいかなくても、もう一回やればいいよ、大人が責任をとるよという姿勢を見せていくことが大切だと思っています。



子どもの学校での様子を知りたい、プロジェクト担当のスタッフと話がしたい、学習の様子を参観したいという時には、どうしたらいいのでしょうか？

学校の参観は、保護者の方はいつでも可能です。事前に Pipit の連絡帳機能に参観したい日時を入力いただければいつでも来校いただけます。スタッフと話がしたい時にも、同じ手順で連絡いただければ、日程を調整することができます。

まおい

家で子どもから学校で困ったことを聞いたり、嫌なことがあったという話を聞いたりしたらどうしたらいいでしょうか。また、「学校を休みたい」という話が出たら、どう対応したらよいのでしょうか。



自分から相談ができない時には、お家で話をすることもあると思います。本人の視点から見えている事実をまず聞くことが大切だと思っています。「そういうことがあったんだね。」「大人に相談してみた?」「明日言ってみたら?」といくつか解決に向けた選択肢を示してみることも方法のひとつです。小さなことでも、気になるときにはスタッフに伝えて下さい。保護者の方もスタッフも、子どもを支える「大人」として一緒に考えていきたいと思っています。

「学校を休みたい」という言葉が出ることはよくあります。まおいは活動が多いので、体力的にとっても疲れます。また、話し合いや考える場面が多いので、頭が疲れて、精神的に消耗することもあります。成長の過程で突然「疲れた、休みたい」ということもあります。はっきりとした理由がない時もあります。休んで回復することも必要と考え、お休みを選択することも大切です。ただ、長く続く場合には、背景に何かある可能性が高いため、面談をしたり、子どもから直接、話を聞いたり大人から関わる対応に切り替えます。

まおい

子どもたちは、今を全力で生きています。将来がどうなるか、将来のためにということは、子どもたちには関係ないので。自由な教育を受け、本来の姿で生活する子どもたちは、それぞれの発達段階に応じて少しずつ成長していきます。

目に見える『結果』を早く求めようとするのも大人はしない覚悟が必要です。

それは、子どもたちのプロジェクトへの取り組み方もそう、基礎学習への取り組み方もそう。そして、人間関係の結び方についてもそうです。「うまくいかない」という経験から、試行錯誤し、時には大人に相談しながら、自分で経験を積んでいくことが成長とその後の変化につながっていきます。

大人がすぐに手を貸し、口を出し、「解決」したように見える、しっかり取り組んでいるように見えるようにすることは簡単です。でもそれは、子どもたちが本当に理解して行動を変えた、成長によって変化したものではないと考えています。**時間がかかるもの、時間をかける必要があるもの**と大人が覚悟を決めなければならないことです。

自分自身を肯定することができるようになった子どもたちは、他者を尊重し、あらゆるできごととも自分の目で見、自分の頭で考えて判断できる、本当の意味で「自分の意思で生きることのできる大人になっていく」と信じて、今関わっていくのが大人の役割です。学校スタッフと学び続け、試行錯誤し続けます。

保護者のみなさんも同じ方向を向いて子どもたちと関わり、共に学び続けていきましょう。